



大阪大学山岳会 会報

No.25

2023年8月

発行 大阪大学山岳会

〒562-0031 箕面市小野原東4-19-45

大野義照方

「温故起新」をテーマに ― 山岳会設立75周年記念事業について ―

75周年記念事業実行委員会

阪大山岳会は、旧大阪帝国大学山岳部が戦後の混乱期に旧制大阪大学の登山組織として全学的な組織的活動ができなかったものを再建すべく、新制大学への移行とともに、旧制浪速高等学校山岳部を土台とする形で昭和24年（1949）に設立された。

来年、2024年は創立75年の節目にあたり、会員の要望を踏まえ、2020年に記念事業を行うことが決定した。その後、理事、評議員を中心に事業内容を検討し、今年5月の理事会でその内容が決定し、6月の総会で了承された。ここではこの事業内容について紹介する。

75周年記念事業は「温故起新（故きを温ね、新しきを起こす）」を基調（テーマ）として、以下の4つの内容を実施する。

①記念集会

2024年6月15日、大阪大学吹田キャンパス
医学部銀杏会館三和ホール

内容

第一部・記念集会

基調報告

- ・50周年以降の活動報告（現役活動含む）
- ・山岳会設立以前の阪大に関する登山団体の活動について

第二部・記念講演会

予定講演者和田城志、尾川智子

懇親会

②記念出版

テーマに沿った形で、50周年記念誌以降の活動および山岳会設立以前の阪大に関する山岳団体の活動について編集、発刊は記念集会に合わせる。

③記念山行

海外山行および国内山行を計画

・海外山行:グレートヒマラヤトレイル(GHT)。
2023年から2029年にかけて実施。

2023年10/28～11/14:カンチェンジュンガ山域、遠征隊BC含む、2024以降の計画に対する現地調査

2024～2029年:2023年の山域から順次西進の予定。

・国内山行

2024年8月、場所・内容はこれからの計画ではあるが、会員の参加しやすい場所（上高地、雷鳥沢等）をBCとし、そこからの日帰り山行（各自計画）を予定

④記念白馬集会

2024年8月、場所は対岳館

これら事業の実施まで1年を切っているが、大野会長を実行委員長とする実行委員会を組織し、各事業の実施にあたっては、理事が実行委員幹事となり、その下に現役を含む実行委員を選任して実施する体制としている。

本事業の総概算事業費は1500万円強であるが、各事業への参加は個人負担を主とし、山岳会の負

担費用は、これまでの積立金および保有資産の取り崩しにより、520万円を充てる計画である。

個別事業の実施にあたっては、その都度会員、現役への実施計画の周知を行い、行事参加を要請

する。

本事業が成功裏に実施できる様、会員および現役の積極的な参加を要望するものである。

(文責：事務局)

山岳部の活動報告

2022 年度総括

2022 年度主将 石井洋司

2022 年度は、コロナ禍の制限が解除されて本格的に活動を行うことができた年でした。

また、6月に wall の改修を行った点でも大きな変わり目だったと思います。山岳会の皆様には、wall の改修、そして日々の活動にご寄付いただきありがとうございました。

去年、部の活動の幅を広げていくという方針を立てました。この1年で登山、ボルダー、外岩ボルダーの活動はもちろん、冬山縦走、リードクライミング、外岩リードクライミング、沢登りといった活動に挑戦することができました。

この1年を振り返ると、上半期では、主に wall 改修があり、部員総動員でホールドの付け替えを行いました。また、先輩部員の力を借りて定期的にホールドの付け替えをすることで、部員のモチベーション向上を図りました。また、夏季休暇に登山研修に参加する部員もいたり、僕自身もリードクライミングの技術を身に着けたり、福島県の百名山の一つである安達太良山を登頂しました。

下半期では、秋季に剣山、冬季に武奈ヶ岳、高島トレイルの縦走を計3回、OBの方々のご協力のもと、無事に遂行できました。また、外岩ボルダーや外岩リードといった、外岩の活動も盛んでした。3月には、追い出しコンペという、卒業の年である先輩を祝う、部内でのボルダーの大会イベントを開催し、2名の先輩部員がご卒業されました。また、今年度の新歓では、外岩リード体験やOBの方々と合同での北アルプスへの新歓登山といった新しい試みが功を奏し、多くの留学生、新入生が入部しました。

一方で、登山・クライミング技術不足の点など、まだまだ課題も十分にあった年でもあります。今後は現主将を筆頭に、新しい山岳部を作っていたきたいと思っております。

2023 年度活動計画

2023 年度主将 北島魁十

本年度山岳部主将を務めることになりました、工学部環境エネルギー工学科3年北島魁十です。2023年度の阪大山岳部では主に大きく分けて三つのことに挑戦したいと考えております。

一つ目は様々な山岳活動の継承です。ここ数年は山岳部と言ってもその活動のほとんどはボルダリングであり、なかなかその他の山岳活動を行っていませんでした。ですが、昨年の部長である石井さんのご尽力もあり、ボルダリング以外の登山、リードクライミング、沢登りといった多岐に渡る活動を展開することができました。私自身、山岳部に入部して以来ほとんどをボルダリングに費やしていたため、ボルダリング以外の知識は乏しいですが、このきっかけを絶やすことなく積極的に様々な活動を企画したいと考えております。そしてそうした活動を通して、部員全体として様々な山岳活動に興味を持ってもらい、のちに続く後輩に継承していきたいと思っております。

二つ目は部としての活動を増やすことです。現在の山岳部は通常、各部員が好きな時間に阪大 wall を利用し、好きな時間にその日の活動を終了する、という体裁をとっています。その活動時間に縛られない自由さといういい面もありますが、その結果として新入部員がなじめずに、徐々に離れていってしまうという弊害も出ています。そのため本年度は部全体としての活動を増やし、部員間における紐帯を強めたいと考えております。具体的には新入生を対象としたボルダリングのコンペや山行、体育会主催のイベントの参加、そして何かの区切りには食事会などを計画できればと考えています。

そして三つ目は山岳部の活動の記録を残すことです。過去にさかのぼると、山岳部としてどういった活動をその年に行ったか、ということについて

て5W1Hが詳しく掲載されています。ですが近年は主にSNS（Twitter・Instagram等）が記録媒体となり、詳細が掲載されていないこともあり、現部員・OB双方に山岳部の活動内容が不透明となっております。今後後輩が山岳部を引き継いだ際に、一年の活動全体の見通しが立てやすいように、またOBの方々に現山岳部の活動を知っていただけるように、本年度よりその年度の活動記録を残していきたいと考えています。

最後に、山行等の際には山岳会の諸先輩方のお力を借りることが多いとは思いますが、ご協力いただけますと幸いです。本年度もよろしく願います。

国立登山研修所登山リーダー夏山研修会報告

3回生 三尾浩輔

8月21日～8月26日の間、国立登山研修所が開催する登山リーダー夏山研修会に参加した。全国から集まった20名ほどの講習生たちと共同生活をし、登山技術を学びながら劔岳周辺の山行を行うというものであった。

私は大学生10人からなる第2班に配属された。参加大学は大阪大学の他、東北大学、金沢大学、日本大学、専修大学、東京農工大学、筑波大学、同志社大学、関西大学、大阪公立大学であった。リーダー研修ということで参加者の多くが部の部長、次期部長であり、講師からは登山技術のみならずリーダーの心得についても多くを教わった。

初日・2日目：施設内での研修

座学や実習を行いつつ、3日目からの山行の計画を立てた。ロープワークやビレイの実習、支点確保の講義は、クライミングの活動においても非常に有意義であった。落下の衝撃を力学的な計算により求め、その衝撃の大きさに驚いた。普段行っているボルダーに潜む危険性を認識することができた。

3日目：入山 夏山前進基地へ

室堂までケーブルとバスを乗り継ぎ、そこから国立登山研修所が所有する夏山前進基地まで歩く。歩荷の総重量は28kgであり、今までの登山の中では最も重かった。基地に到着後、草むらでアイゼンでの歩行訓練を行った。

4日目：劔岳アタック

平蔵谷の雪渓から劔岳を目指す。天気はガスが濃い曇り空。劔沢雪渓上部でアイゼンを付け、ピッケルを杖にひたすら登る。初の雪上アイゼン歩行であった。雪渓は固く斜面は急で、一度滑落すると停止するのは難しそうであった。「滑れば岩にぶつかり砕け散る」という講師の言葉に身が震えた。恐怖から呼吸も荒くなった。集中が途切れないよう、リーダー役の班員が声をかけて班の気を引き締めた。リーダーの役目の必要性を実感した。

雪渓を抜けた先にある、難所といわれる岩場（カニのたてばい）は問題なく登ることができた。普段の練習の成果だと思う。山頂についたと同時に周囲が晴れ渡り、その日初めての青空が見えた。数分の間であり非常に幸運だった。平蔵谷は未だガスで覆われていたため、劔御前経由で下山した。帰り道は途中から競争を行った。毎年恒例らしい。講師には敵わなかったが班では一位だった。嬉しい反面、今後体力的な弱音は吐けないというプレッシャーを感じた。

5日目：奥大日岳・別山

この日は私がリーダーだった。激しい雨により出発を遅らせた。当初は大日岳で折り返す計画だったが、奥大日岳での折り返しに変更した。その判断も全てリーダーが決断しなければならず、他の班員はリーダーの決定に抗議しないよう言われた。登山には危険が伴い即断即決が求められるからこそ、隊とはそうあるべきだと教わった。

この日の道中はたくさんの雷鳥に出会った。6匹の雷鳥がカルガモのように登山道を歩く姿はとても可愛らしかった。

幕営地に戻ったあと、救助訓練を行った。一人の人間を運ぶことがどれだけ大変かを実感し、山で負傷することの危険性を理解した。

6日目：下山

雨の予報は外れ、朝焼けに照らされた劔岳を拝むことができた。テントを撤収して、室堂へと帰る。途中からまた競争を始めた。今回は一位になれなかったが、室堂の高原を走るのは心地よかった。空は晴れ渡っていて、最後の集合写真をとった。この6日で班員ともすっかり打ち解けていた。本当に充実した日々だった。2022年の思い出を聞かれたなら、真っ先にこの研修を上げるだろう。支援してくださった山岳会に感謝する。また、コロナ禍で経験の浅い部員が多い今だからこそ、教わったことを部にしっかりと伝達したいと思う。

クライミングウォール改修報告

2022 年度主将 大澤 駆

日頃より山岳部活動に御協力・御支援をいただきありがとうございます。

さて、日々の活動場所である阪大 Wall は建設後の経年劣化に対する安全性確保や壁の形状を少し複雑化することで部員の技術向上や活動の活性化につなげるべく、改修することにし、会員の方々へ寄付を依頼しましたが、無事改修工事を完了し

ましたので報告します。

工事日：2022 年 6 月 16 日、23 日、27 日
工事業者：ナカガイクライミング株式会社
総費用 979,000 円
寄付総額 735,000 円
未来基金管理手数料 36,750 円
工事費用 489,500 円

(費用は中之島山岳部と折半)

残高 208,750 円

残高については、山岳部の活動資金に充当します。多額の御寄付ありがとうございました。

山行報告 (2022.4 ~ 2023.3)

白山縦走

2020 年の GW にも同じルートの南半分を一人で登った。御前峰から北に抜けるには下山後の足の確保と荷物の増加という問題があり石徹白から御前峰へのピストンだった。今回は石原さんに同行していただけることになり、車 2 台、3 泊 4 日すべて小屋泊を計画した。一気に駆け抜けるといって勝手に描いたイメージとは程遠く毎日ヘトヘトだったが記憶に残る山行となった。下山地のデポ車が地元の人から警察に連絡されるというオマケ付きだった。

【期 間】 2022.5.20 ~ 22 (3 泊 4 日)

【参加者】 石原、科野

【記 録】

5 月 20 日 (金) 曇 石徹白登山口 (7:30) — 神鳩ノ宮避難小屋 (10:00) — 銚子ヶ岳 (11:30) — 三ノ峰避難小屋 (15:20)

登山口の 6 キロ手前 (上在所) からの林道歩きを覚悟していたが除雪やデブリの撤去がされていて石徹白登山口まで入ることができとても助かった。登山届を出し石徹白の大杉に挨拶してから登りだす。5 月も下旬となると雪は少し残すのみだったが三ノ峰の急斜面は雪がべったりでアイゼン、ピッケルが役に立った。三ノ峰避難小屋は二人独占、きれいで快適であった。

5 月 21 日 (土) 曇 三ノ峰避難小屋 (6:20) — 別山 (8:40) — 御舎利山 (9:05) — 油坂の頭 (11:05) — 南龍ヶ馬場キャンプ場 (12:50 - 13:50) — 室堂センター (15:50)

この日は朝から風がある。別山までは雪混じり

の快適な尾根歩き。御舎利山でアイゼンをつけピークごとに巻くか尾根通しか判断して進む。油坂の頭を下ったあたりから体力的にきつくなり、ブッシュに突っ込んだりしながらキャンプ場の小屋で雨宿りの大休憩。雨にたたかれながら室堂にたどり着く。

5 月 21 日 (日) 晴 → 曇、夜間雷雨 室堂 (6:40) — 御前峰 (7:40) — 北弥陀ヶ原 (11:40) — 地獄のぞき (12:55) — 三俣峠 (17:25) — ゴマ峠 (19:20)

快晴であったが前日の疲れから遅めの出発。御前峰から翠ヶ池を過ぎると緩急はあるもののずっと雪の下りだがグリセードをする体力はない。2 か所ほどロープを出し、慣れないため結構時間をつかってしまう。気が付くと 19 時を過ぎていて、ゴマ平避難小屋へは森林帯となるため暗さと雪の踏抜きを恐れてビバークする。夜間カミナリがバキバキ鳴ったが運を天に任せて眠った。

5 月 22 日 (月) ガス → 晴 ゴマ平峠 (6:05) — シンノ谷出合 (7:05 - 8:05) — 妙法山 (11:00) — 野谷荘司山 (15:40) — 大窪 (鶴平新道登山口) (19:05)

最終日も長い一日だった。ビバーク地を出発後に水場で朝食。念仏尾根に入り雪も減りこの日はロープを使うことはなかった。尾根自体にアップダウンは少ないが最後のピークの野谷荘司山から 1000 m 一気に下り、途中薄暗くなりだしたが下山したときは安堵感でいっぱいだった。(科野)

立山三山

2019年に石原君といった針ノ木岳の下山中、ひざ折れで転倒し、それ以来ひざの具合が悪く、さらにコロナの影響で山から遠ざかっていたが、ジムでのリハビリ等でひざの具合も回復したように見え、コロナも収まる傾向が見えたので、久々の山行を計画した。一般交通機関でできるだけ高度を稼ぎ、山高も3000m程度、気の向いた時に単独で行けるといった条件から、立山三山を計画した。

【期間】2022.9.10～12（2泊3日）

【参加者】山田靖則

【記録】

9月10日 晴

室堂バスターミナル（13:05）－雷鳥沢キャンプ場（14:00）

大阪を7時過ぎに出発し、立山黒部アルペンルートで12:50室堂着。ターミナルで食事をして雷鳥沢へ。石畳の下りはひざにこたえたが、1時間足らずで雷鳥沢キャンプ場着。予想外にテントが多い。夕食後、お茶を飲もうと思ったが、緑茶も紅茶も忘れており、味気のない食後となった。

9月11日 曇

雷鳥沢（5:30）－室堂山荘（6:40）－浄土山（8:30）－一ノ越（9:00～9:40）－雄山（11:00）－大汝休憩所（11:30～11:40）－富士折立（12:00）－真砂乗越（12:20～12:30）－雷鳥沢（15:00）

雷鳥沢を5:30に出発し、立山の下を一ノ越に直接向かうルートから別れて室堂山荘へ。途中一ノ越からの沢（称名川源流）を横切る箇所丸太階段が濡れていたため、滑って転倒しないよう慎重におりたため、時間をくってしまった。浄土山の登りは山頂の下が大岩交じりの急登で、頂上に着いた時は息が上がっていた。浄土山からの途中、龍王岳によるつもりであったが省略。一ノ越で水を購入する予定であったが、売店は閉鎖。食堂の水道で水をわけてもらった。雄山への登りは家族連れも交えた混雑であったが、ピッチが上がらず、常にトップを歩く状態で、後続の人に道を譲ったりで時間がかかった。雄山からは、人も少なくなり、久々の縦走気分を味わった。大汝、富士折立もピークは省略。真砂乗越まで下って時間を見ると12:30で、別山乗越までの時間と、それからの下りとひざの具合を考えると、テント帰着は18時ごろになりそうなので、ここから大走りを下山

することにした。この大走りはほぼすべてが下りであったが、早く下ることができず、ほぼすべてその後続者に抜かれる始末で、テント帰着まで地獄状態。結局2時間半を要してテント着。結果的には、このルート省略が妥当な判断であった。

9月12日 曇

雷鳥沢（5:40）－室堂バスターミナル（7:15）

前日の夜、降雨があったためフライやテントが濡れ、撤収に時間を取られたが、5:40出発。昨日の下りの疲れで、雷鳥荘までの登りは何とか消化できても、その後の下りになると不安になり、下りのない道を通った（室堂山荘に行くルート）ため、予定より大幅に時間がかかった。

久々の山行で予定通りの立山三山縦走は完遂できなかったが、楽しい山行ではあった。

（山田靖則）

武奈ヶ岳（比良山系）

【期間】2023.1.8～9（1泊2日）

【参加者】石井洋司、三尾浩輔、河原聡希、斎藤優久乃、東條公資（OB）、大西啓之（OB）、奥山宏臣（OB）、草尾寛（OB）

【記録】

1月8日 晴時々曇

9:15 入山（イン谷口）－12:15 北比良峠－12:40 テン場（八雲が原）～野営、雪上訓練－15:30～夕食－20:30 消灯

雪上訓練の内容

- ・ピッケルの使い方・ピッケルワーク講習
- ・雪面の登り下り・直登（キックステップ）などの雪上歩行訓練
- ・初期制動と滑落停止技術（ピッケルストップ）の訓練
- ・ロープワーク講習、ビレイ訓練

雪上訓練風景



雪上訓練風景

1月9日晴時々曇

4:30 起床 - 6:00 出発 - 7:25 武奈ヶ岳頂上 - 8:40 テント撤収 - 9:20 八雲が原 出発 - 11:20 下山 (イン谷口)

ルート状況

雪やや少なめ

積雪量：イン谷口—大山口の途中で、雪が積もっていた。アイゼンを装着したのは、大山のあたりであった、以降は膝位まで積もっていた。

トレース：武奈ヶ岳頂上付近だけ、トレースの跡が薄かったが、それ以外の道はトレースがしっかり残っていて歩きやすかった。

雪の状態：トレースがしっかり残っていたため、道の雪は圧縮されていたが、新雪も残っていた。



武奈ヶ岳 登山経路

【感想】

石井

まずは、本格的な冬山登山は初めてで心配なことが多くあったが、無事に下山することができてよかった。冬山では、夏山と違い歩行技術や登攀技術が必要であることや、よりシビアな判断力が必要であることを痛感させられた。また、気候が厳しく装備も重いので、活動時間が限られていることも冬山の難しさであると実感した。一方で、夏山と違った景色や神秘さが見られたことが何よりも感動した。個人的には、さらに標高のある冬山に挑戦してみたいと思う。

三尾

麓には雪が積もっていなかったもので、山頂付近にだけうっすら積もっている程度だと最初は思っていたが、想像以上に本格的な雪山だったので驚いた。今まで登った夏山とも違う、独特の世界だった。初日と2日目で北比良峠からの景観が大き

く違うのが印象的だった。山頂から見た雲海と朝日は綺麗だったが、今度は琵琶湖が映えている景色も見てみたい。今回通った道や泊まった場所は、夏にはどのようなのかも気になる。冬山という新しい山の楽しみ方を知ることができて良かった。他にも、登山口と中腹以降で雪の状況が大きく違うことが分かった。また、トレースが十分についている道、ついていない道で歩き方が大きく変わることもわかり、冬山はさまざまな下地のコンディションに対応できる歩行技術が必要だと分かった。

河原

初めての雪山でしたが、特に大きなトラブルもなく、無事登頂できました。武奈ヶ岳は以前秋に登ったことがあります、その時とは景色は全く異なり、白銀の山々が連なる様はとても美しかったです。2日ともコンディションが良く、1日目は広大な琵琶湖を、2日目はどこまでも広がる雲海を見ることができて嬉しかったです。そして写真を送ってくださりありがとうございました。みなさんの写真のおかげであの時の感動、喜びが自然と思い出されます。一方雪山訓練では経験豊かなOBの皆さんのおかげで、雪山の歩き方を知ることができました。それまでピッケルが必要な理由すらわからなかったのですが、スティック代わりとして、滑落時のストッパーとして、リードの支点として使えるなどこんなにも役に立つのかと驚かされました。知識と経験はいざという時に、我が身を救います。今後とも自分で調べつつ、みなさんのお力を借りて、さらなる知識蓄積、技術向上に努めていきたいです。

【反省点】

石井

- ・パッキングの技術がなく、無駄が多かった。また、必要な装備と不必要な装備が把握できていなかった。
- ・途中で水が足らなくなった。仲間から分けてもらうことができたが、ソロである場合、死活問題なので、余裕のある量の水を持っていくようにしたい。
- ・歩行技術に未熟な点があるので、磨きたい。
- ・手袋をしたまま、アイゼンを着用できるようにしたい。
- ・アイゼンやピッケルの必要性を感じたので、装備を揃えていきたい。

三尾

- ・休憩中、動きを止めたり、作業のため素手になったりすることで、手や足先が一気に冷え、それに伴って体全体もすぐに不快になった。靴、グローブ、ネックウォーマー等の末端の防寒が重要だと分かった。
- ・雪道とアイゼンについての理解がなく、隊の行動を遅らせた。
- ・ピッケルが割れた。
- ・準備に慣れておらず、前日の睡眠を十分に取れなかった。
- ・不要な荷物が多かった。今回で必要な荷物、不必要な荷物を理解することができた。

河原

- ・本格的な冬山では軽アイゼンが機能しないのだと知りました。
- ・食料はちょうど良いくらいでしたが、予想以上にお腹が減ったので次はもう少し多めに、腹持ちの良いものを持っていきたいです。
- ・途中山靴が濡れてしまい、かなり足がかじかんでしまったので、防水スプレーを塗布したり、冬山用の靴を買う必要性を痛感しました。
- ・低山の雪山ではスティックは1本で十分だと感じました。両手が塞がっていると、咄嗟にもものを掴むというようなことができなくなるとわかりました。
- ・日焼け止めアイテムは持っていかなかったのですが、数十年後に身体に影響を及ぼすと聞いて、少し怖くなったので、次回は忘れずもっていきます。

高島トレイル（滋賀・福井県境）

【期間】2023.3.3～5（2泊3日）

【参加者】石井洋司、三尾浩輔、河原聡希、科野昌藏（OB）、草尾寛（OB）

【記録】

3月3日 晴時々曇

10：45 入山（国境高原スノーパーク）－14：41 乗鞍岳－15：15 テン場（乗鞍岳下部）着－15：30 野営－16：00 夕食－20：00 就寝

3月4日 晴時々曇

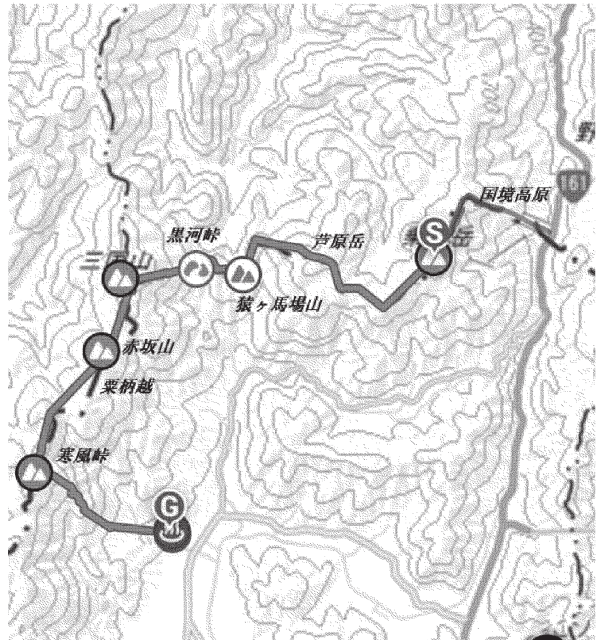
5：00 起床－6：30 出発－8：16 芦原岳－10：38 黒河峠－12：51 三国山－14：52 赤坂山－15：15 テン場（赤坂山下部）－15：30 野営・ツェルト訓練－16：00 夕食－20：00 就寝

ツェルト訓練内容

非常時に使うツェルトを実際に使用する体験。使用する状況や使用方法、ツェルトの暖かさについて学びました。

3月5日 晴時々曇

5：00 起床－7：00 出発－7：10 粟柄越－8：36 寒風峠－10：30 マキノ高原温泉さらさ
登山経路：



ルートの状況

雪・・・かなり多し

積雪量・・・国境高原スノーパークから積雪していた。アイゼンを装着したのは、789m地点から始まる稜線につながる尾根の650m地点であった。それ以降は膝位まで積もっていた。稜線に付いてからワカンを着け、歩みを進めた。寒風峠から琵琶湖に向かって伸びる尾根の562m地点まで雪が続いていた。

トレース・・・黒河峠から三国山をトラバースし赤坂山まで、1本だけあった。赤坂山以降は粟柄越、寒風峠まで複数のトレースが連なっていた。一方国境高原から黒河峠までは一切トレースがなかったので、ルートファインディングが必要であった。

雪の状態・・・ほとんどが新雪であり、腰の高さまで雪が積もる所もあり、ラッセルに苦勞するほどであった。また赤坂山への急登などの風が強く吹き付けるところや朝の雪道は凍りついており、アイゼンが必要であった。

【感想】

石井

前回の比良山の雪山登山に比べて、トレースのない道を歩かないといけない点や縦走という点で、本格的な冬山登山だったと実感した。自分は、まだまだOBの方に頼りきりということも実感して、登山計画、装備、歩行技術、状況把握能力など、改善すべき点が多く気づけたので、大きな収穫だったと思う。

三尾

全行程が長かったことと、トレースが少なかったことによって、前回の雪山よりも本格的な登山をすることができた。とくに、登山道ではない新雪を歩くことで、道を自由に決めて登山できることは、今までにない経験だった。冒険感が強く、登山のより一歩進んだ楽しみに気づくことができた。岩壁を登って登山することにも、達成感やスリルだけでなく、同様の冒険的な楽しさがあるのだと思う。いつかやってみたいと思った。またワカンの便利さを知ることもできたし、新雪を沈まないように歩く技術も鍛えることができた。あと、テント内の食事が楽しかった。今までテント内の食事はあまり意識しなかったのだが、バリエーションも豊富で、工夫して楽しめる点がまだまだ登山にはあることに気付かされた。今後自身で山行を計画するときや、新歓をする時の参考にしたい。全体を通して、新たな発見が多く、非常にいい経験になった登山だった。準備していただいた科野さん、草尾さんどうもありがとうございました。

河原

今回は本格的な雪山山行であったが、人も少なく、足跡もなく、一面銀世界の雪原を歩いていくのは新鮮で気持ちよかった。その分、ルートファインディングが難しかった。山道が雪で隠れているので、赤テープを頼りにするが、赤テープまでも雪で隠れていたりして、苦戦した。しかし必ずしも山道に従う必要はないので、夏道とは異なり、思わぬショートカットを見つけたりして、自分で道を切り開いていくのが面白かった。またアイゼンとワカンの使い方を今回で習得できた。実際に装着すると、楽に歩けるようになり、足への負担がこんなにも減るのかと驚いた。アイゼンとワカンを同時に装着する方法もあり、勉強になった。そして読図のときにYAMAPが非常に役立った。雪山ではややもすれば、道を見失ってしまうので、定期的に確認することで、大幅なロスなどを無くすことができた。

【反省点】

石井

- ・スノーブーツを履いてきたが、スノーブーツでは、底が柔らかいので、キックステップができなかったうえ、新雪では足が埋まってしまって、体力の消耗が激しかった。
- ・キックステップなどがやりづらかったこともあるが、久しぶりの雪山登山で序盤は歩行が難しかった。もっと、歩行技術を磨きたい。
- ・初めて、トレースがない道を歩行することになり、目印が少ないなかで、正しいルートを見つけながら歩くのが難しかった。

三尾

- ・防寒が足りなかった。前回の山行の反省からで足先、手先の防寒対策には気を使ったが、全身の防寒具が不十分だった。また、シュラフも3シーズンのもを使用していたため、夜の寒さで十分に休むことが出来なかった。今後は、同程度の山に登る時は、薄手だが保温性に優れた上着をもう一枚と、シュラフのインナーシートを準備しようと思う。また、より高度のある雪山に登る時は、冬用のシュラフを購入しないとイケないと思った。
- ・読図にも反省点が多かった。今回の山行は今までとは違い、道を自分で決定しないと行けなかったため、読図ができていない状態で先頭を歩いて、ペースを遅らせてしまった。油断してYAMAPの地図をダウンロードしていなかったのが1番の反省だった。ペースを保つことと、遭難から身の安全を守るため、モバイルバッテリー等、電子機器関連の装備も見直さないとイケないと思った

河原

- ・今回も前回に引き続き、靴に水が染み込んできて、靴下が濡れた。またゲイターのサイズがあっていないことで、雪が入り込んでしまい、いっそうびしょびしょになってしまった。低山だからよかったものの、もっと高山では凍傷になりかねないので、冬用の靴を買い替えることを決めた。
- ・シュラフに包まる時、足先が冷たかったので靴下を2重履きにするか、もう少し防寒性能のあるシュラフを使うべきだった。
- ・調理はOBの方々に任せきりだったので、ナイフやライターなど飾りではなく、ちゃんと使えるものを持ってくる必要があると思った。

細見一仁夫妻と白馬

名誉会員 丸山 庄司

1948年(S23)阪大山岳会の細見一仁夫妻は、新婚旅行に3月下旬の北アルプス「杓子岳登山」を計画した。前日は我が家(対岳館)に、サポートをする後輩の辻川真さんと宿泊した。

小日方向のコルまでの荷揚げは丸山庄司、丸山忠孝が担当。一行5名は、3月下旬、正午頃、猿倉小屋出発し、杓子尾根の小日向に向かう。3月というのに雪は何日も降り続き、猿倉小屋裏から深雪をラッセルしながら進む。ブナ林を抜けて長走り沢に入ると、先ほど発生したばかりの雪崩の後に出る。30分早ければ巻き込まれたらうと、みんなで安堵する。

雪崩の心配のない、小日向尾根の急斜面に取り付き、深雪の斜登行に苦勞し小日方向コルに着く。岳樺を利用してテントを設営し両丸山は下山。その何日後か、記憶にないが、細見さん一行は下山し、我が家に帰りくつろぎ、無事を祝い、みんなで乾杯した記憶がある。

1980年ごろだと思う、小学生の2人お子さんを連れて一家4人で、1週間ほど滞在したことがあった。歯科医を開業しているが、細見さんは心臓病に侵され体調がよくないので、のんびりしたいという。

3日目に、八方尾根の Gondola とリフトを乗り継いで黒菱平まで同行した。思い出の白馬三山や五竜岳を眺めながらゆっくり過ごす。帰りは、元気が出たのかアルペンリフトに乗らず、歩いてみたいという。しかし、中間付近まで下りたら、鼓動が激しく歩けないという。平のところには寝かせ、リフト乗り場に頼んで、リフトを止めてもらい、乗せて無事帰った。体調は良くないようだ。

大阪に帰って2か月ほど過ぎたころ、電話があり、大分体調がよくなったと、元気な声が聞けてほっとする。

その後に電話があり、久しぶりに3月のスキーをしたいという。元気になったようなので安心する。我が家に着くと、以前の細見さんに戻って安心して安心する。

あんなに体調不良だったのが、白馬から帰ったら、日毎に体調がよくなった、白馬の環境が良い

のだと思うという。

そして、別荘を作りたいので手伝ってほしい。スキー場コースに近くて、少し不便でもよいので、静かな雰囲気のところでも山小屋風にしたという。3人であちこち捜し歩いた。

それが現在の「細見山荘」?である。地主は私の従弟の土地で問題なし。水は近くに湧水があるので利用することにした。2年ほどして、水質検査をすると不合格となり、現在は白馬村の上水道から引水している。

完成後は夫妻でよく利用していた。手前のアルペン山荘と懇意になり、預けたゴム長靴にはきかえ利用していた。山荘が出来てから山よりスキーに熱中していたようである。伝統の八方尾根リーゼンスラローム大会にも、二人で出場した。奥さんは女子の層が薄いとはいえ、入賞したこともあった。

あるとき、電話があつて白馬の家は「ゆき」に譲りたいのでと頼まれ、村役場などに手続きを済ませた。その頃、ゆきさんが、若いのに「博士号」をとられたとの喜びの電話の声を今も思い出す。

振り返ればそのころ白馬にくと、我が家に泊まるようになった。中庭のステージで、フラメンコを見せてくれた。そのあと、大阪の細見歯科医院を訪ねたら、待合に大鏡があり、聞くとフラメンコの練習用だという。ビックリした。私も、スペインで本場のフラメンコを見たことがあったので、話がはずんだ記憶がある。

細見さんとは阪大山岳部の登山で、黒部川や後立山～穂高岳方面を縦走したこともあるが、スキーの方が多し。夏のサマースキーまでした。

白馬の家は、孫の智子さんが良き仲間と守り、利用してくれているので、安心して居る。そして、我が家に立ち寄ってくれることがうれしい。

先ころ、細見さんのご子息が、ご両親が亡くなられたことの報告にこられた。医師で60歳になられたという。40年ぶりの再会だった。そのとき、



丸山庄司氏

細見さんの杓子岳の新婚旅行のアルバムをもってきてくれたので、細見家と私の思い出をたどって

みた。

会員近況

二木節夫（工 1954 卒）

まだ生きています。旅行もせず、生活範囲は岐阜市の中だけです。車が無いので必要な時はタクシーを利用してあります。

楽しみと云えば茶会に参加して若い人をメチャメチャにやっつけること位です。

高木俊夫（理 1956 卒）

遠隔の地に移住し、また高齢でもありますので、諸行事には参加できません。今は無き中之島本部の屋上の部室での集会を懐かしく回想しています。新入部希望者の大半が、所謂、クライミング希望と伺い、今昔の念に浸っています。

野田憲一郎（経 1960 卒）

脳出血で倒れて3年近く。介護保険の「要支援2」で毎週ハビリに通うなど、機能回復につとめています。平地では杖なしで歩けますが上り坂や山道では杖にすがって。ハイキングに行きたいけれど、途中でダウンして仲間に迷惑をかけそうで我慢しています。

金子忠男（工 1962 卒）

85歳になり、年相応老化しています。最近は市民農園での野菜作りに精を出しています。

白井達郎（工 1962 卒）

年を重ねるに従い、体力低下は目をおおうばかりですが、小康を得て比較的元気にやっております。妻に先立たれ、現在独りぐらしです。

高田邦雄（経 1965 卒）

以前から悩んでいた脚のふらつきが最悪状態です。家の中などでは何とか歩けるのですが、外に出ると両手にストックを持たないと歩けません。当然大阪まではいけない状態です。

豊坂昭宏（医 1966 卒）

今年1月勤務している病院で、コロナのクラスターが発生。患者・職員合わせ45人が感染。いずれもコロナの新薬は要せず、点滴のみで肺炎にもならず全員治癒したが、院内は職員不足等で大変でした。コロナは弱毒化しているようです。山はこの3年ご無沙汰。週3回のジムと週1回のス

トレッチに通っている。

出雲路敬孝（工 1967 卒）

最近スタミナ並びに身体機能の衰え目立ち、軸足がハイキングやウオーキングに移りつつあります。

畑中 薫（医 1969 卒）

5月19日の朝、胃カメラ検査を受けてから散髪に行くつもりで歩いて内科医院に行きました。胃カメラ検査の準備中、「脈拍が30台と遅すぎる」ので、胃カメラが中止され、救急外来へ紹介されました。完全房室ブロックなので、心臓ペースメーカー植込みはが必要となり、5月25日に手術を受けました。5月31日に退院し、経過良好なので6月7日から出勤しています。私はお願いしなかったのに医療機関同士の速やかな適切な連携作業で、文字どおり「命拾い」をさせていただきました。大感謝です。

岡田謙治（法 1969 卒）

相変わらず歳なりに元気に遊んで過ごしています。アウトドアでは、1～2月は夫婦で柵池のスキー、3～12月は夫婦で琵琶湖でのセーリングです。インドアでは、毎日PC相手に3DCG（POV-RayやMetasequoiaが道具）三昧です。

稲垣佳夫（工 1972 卒）

5月に坂巻温泉に行って来ました。何十年と通過すだけで、気にはなっていたのですが、やっと行ったと云うところです。上高地はリッチなホテルだらけですが、こういうところも元山屋には合っています。

井上太一（理 1973 卒）

昨年秋、妻と京都三条大橋から日本橋まで旧東海道53次500数十km歩き通しました。16日間で平均1日35kmでした。妻も自信がついたようで、コロナも終わったこともあり、今年の秋、妻とサンチャゴ巡礼することにしました。フランスのリヨンからピレネー越え800km+スペインのオビエドからサンチャゴ300km+aの工程で50日間予定しています。

上松一雄（工 1975 卒）

MHIはMRJ失敗後65歳以上雇い止めが始まり、見渡すと私のみが残り、働いている人は皆社外に出た人ばかりのため、70歳に2022年11月

に達する私は就活に入り、幸運にも大阪の会社からオファーがあり、2022年10月から延長含みの2.5年契約で働いています。ワングル時代同期30名、MHI同期40名の内、働いているのが10名程度、物故者3名と今の年寄り若いです。コロナが明けた2023年は既に7回宴会をやって旧友を暖めています。水泳、スキー、ゴルフが主で、時々登山で体を鍛えています。来年6/15の記念集会で皆さんと会うのが楽しみです。

大宅幸夫 (齒 1976 卒)

6/25に曾爾の兜岳登ってきました。体力がなくて鎧岳を超える縦走は果たせませんでした。

木嶋良雄 (工 1979 卒)

日本原燃(株)濃縮工場の核取業務(核燃料取扱主任者)で現役です。

週末は尾駈海岸の砂浜歩き、尾駈沼のシーカヤック遊び、合唱教室で合唱練習、下手なトランペットでビートルズ・メロディー吹き、結構楽しく過ごしております。

それから、三沢フルートアンサンブルに所属してクラシック曲を練習、定期的に演奏会に出演しています。音楽は六ヶ所村に丁度20年前に来てから始めました。人生の友です！

明神知 (基 1978 卒)

今年度は定年延長で大学院研究科長ですが、恐らく来年度は特任で最後のお勤めになりそうです。

それまでに北海道の山々には登ってみたいと考えていますが、良い時期にはヒグマが出てくるのでこちらの山の会などに入ろうと考えています。

藤田繁雄 (医 1991 卒)

和歌山県田辺市にクリニックを開業して8年目。この3年ほどはコロナに振回されました。本当は60になる前に、雪のついた北アの稜線へと思っていましたが、60になってしまいました。70にむけて身体を鍛えるべく、ロードバイクを買いました。

計 報

播本 裕晃 氏

3月25日に亡くなられたと、御遺族から連絡がありました。1965年、法学部卒。1961年入部、各期の合宿に参加され、1964年春合宿の針ノ木縦走隊メンバーが主だった記録として残っていません。

梅の木寮の思い出

会長 大野 義照

大阪大学山の家「梅の木寮」は建設から61年、解体から24年になる。当会では昭和54年(1979)から、「梅の木寮集会」として、会員が梅の木寮に参集して懇親を深める行事を行ってきた。初代会長篠田軍治先生が梅の木寮集会に参加された写真があったので当時を振り返ってみた。

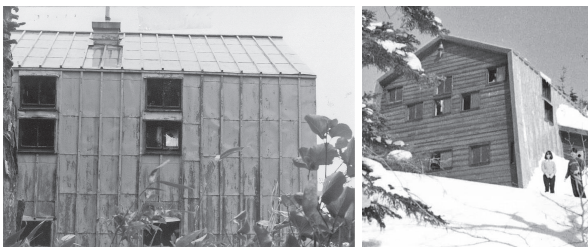


写真 1.2 梅の木寮西面 梅の木寮南面 (初冬)

梅の木寮の経緯

昭和37年(1962)大阪大学山の家「梅の木寮」が長野県北安曇郡小谷村に建設される。山岳部員

も備品などを荷上げ。

昭和38年(1963)の冬から山岳部は梅の木寮にて新人合宿。天気の良い日は天狗原まで登って雪上訓練を行い、合宿の終わりには小蓮華岳まで登ることを目標とした。

昭和54年(1979)から8月の終わりに「梅の木寮集会」を行う。

昭和62年(1987)夏に「開設25周年記念式典」が関係者一同参集し、盛大に行われた。

平成8年(1996)1、2月の大雪で小屋は傾き使用中止。

平成11年(1999)秋解体され、跡地は自然に戻された。

建設位置

梅池ゴンドラ終着駅「梅の森駅」から北へ600m(直線距離)、神の田圃からは南に20m、標高1720m。

第2回榎の木寮集會に篠田軍治先生が参加された。その時の写真と先生のプロフィールを紹介する。

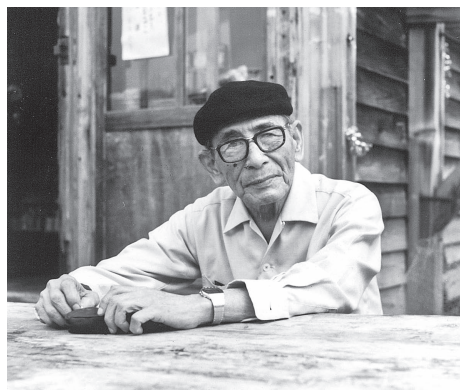


写真3 第2回榎の木集會参加時の篠田先生

篠田軍治先生（初代山岳会長・山岳部長も兼務）

年譜

- 明治 37 年 (1904) 千葉県船橋市にて生まれる
- 大正 9 年 (1920) 旧制松本高校理科甲類に入学
- 同 12 年 (1923) 京都大学理学部物理学科に進学
- 同 15 年 (1926) 京都大学工学部大学院に進学
- 昭和 14 年 (1939) 大阪大学工学部精密工学科教授
- 同 16 年 (1941) 日本山岳会入会
(会員番号 1887)
- 同 22 年 (1947) 日本山岳会関西支部長
(昭和 32 年まで)
- 同 24 年 (1949) 大阪大学全学山岳部発足、部長就任
- 同 36 年 (1961) 大阪大学第1次 P29 峰登山隊々長
- 同 37 年 (1962) 大阪大学“榎の木寮”竣工(実行委員長)
- 同 38 年 (1963) 大阪大学第2次 P29 峰登山隊々長
- 同 41 年 (1966) 日本学術会議々員
- 同 42 年 (1967) 大阪大学退官、同大学名誉教授
- 同 45 年 (1970) 大阪大学第4次 P29 峰登山隊登頂に成功
- 平成元年 (1989) 日本山岳会名誉会員
- 同 2 年 (1990) 10月7日逝去(享年 86 才)

(篠田軍治先生を偲ぶ 発行大阪大学山岳会より)



写真4 第2回(1980)榎の木寮集會

篠田軍治会長と山田朝治部長を囲んで。後方は榎の木寮東面(無雪期入り口側)

後列左から野田、関本、木村、実戸、山本
中列 大工原、広瀬、同伴者2名、篠田先生、大島

前列 黒岩、田井、田島、山田先生、松尾



写真5 (1985～90頃)榎の木寮集會

山田朝治部長を囲んで、大島、野田、山本、岡田、出雲路、糸井、辻、細川、明神、松尾ほか。同伴者も多い。

編集後記

会報 No.25 を送付いたします。コロナ感染や酷暑、更には台風の襲来などで、外出も控えざるを得ない昨今で、山行にも影響があるのかなと感じております。そんな中、来年には OUMC 創立 75 周年を迎え、記念集會が計画されております。会員の方々の再會の場となるよう、多くの参加を期待しております。